The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「文明国標準」の帝国 : 国際協調外交の選択と展開
Author(s)	酒井, 一臣
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43338
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	酒井一臣（さかい かずおみ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　16694　号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	「文明国標準」の帝国－国際協調外交の選択と展開－
論文審査委員	（主査） 教　授　竹中　亨 （副査） 教　授　杉本　淑彦　　助教授　藤川　隆男

論文内容の要旨

本論文は、国際社会のなかで日本が自らの国家的アイデンティティをどのように規定しようとし、それがまた日本外交にどのような影響を与えたかを、第一次大戦からワシントン会議にかけての時期を対象にして解明しようとした論考である。国際協調と帝国としての対外政策という二つの要素が、現実の日本外交でどのように交錯していたかを、「文明国標準」という概念を使って分析しようとしている。本文は400字詰め原稿用紙約360枚からなる。最初に問題設定のために1章が置かれ、その後に3部からなる本論部分が続き、最後に結論の章が設けられている。本論部分は、第一部が南洋群島委任統治をめぐる問題、第二部が日豪関係、第三部が新四国借款団の成立という内容となっている。

本論文はまず、これまでの研究が植民地支配から太平洋戦争までの日本の対外政策を、皇民化・反西洋的侵略という意図で一貫していたと捉えることに疑問を呈する。筆者によれば、近代日本には西洋諸国と比肩する文明国であろうとし、また西洋から文明国の一員と認められたいという強い欲求が充溢していた。筆者はこれを「文明国標準」の思考様式と名づけ、それが1920年代の日本の対外政策の基調であったと考えるのである。南洋群島統治には、そのことが明白に窺える。そもそも大戦中に占領された際にも、事前に明確な計画はなかったし、また委任統治下では、文明国としての日本が「野蛮」を管理するという側面が強調されたのである。

同様に、第一次大戦後の大陸政策でも国際協調が基調となっていた。とくに、西洋的価値観に同化していた国際金融家らのエリートが中心になって作りあげた新四国借款団はその結晶であった。

もちろん、こうした動きは他方では反動をも引き起こさずにいない。日本が文明国の仲間入りしようとすればするほど、それは逆に既得権の侵害を懸念する西洋側の警戒を呼び起こした。本論文は第二部において、白豪主義や移民問題などを軸に日豪関係の摩擦を論じている。そして1920年代の「文明国標準」的国際協調は、やがて日本国内で民族主義的・大衆的ナショナリズムが高まってくるにつれて後退していくと展望する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、1920年代の日本の対外政策について、独自の観点から、従来と異なる見方を提起している。この点は大いに評価に価する。筆者の説く「文明国標準」的外交政策というテーゼが、本論文で論じている南洋群島問題や対中

借款団問題などの対象を越えて、どこまで妥当性をもつかはきわめて興味深いところである。今後、学界での議論を大いに喚起するに相違ない。

方法的にも、本論文は自覚的なスタンスをとっている。最近の帝国史研究が社会史や文化研究の方法によって大いに視野を拡大したことを認めつつも、筆者はそれが植民地支配の構造にすべてを帰着する、一種の陰謀史観に陥っていると考える。そこで、本論文では、旧来の政治外交史と社会史を結合することを試み、「文明国標準」という時代の雰囲気から外交を解き明かそうとする野心的な視角を設定するのである。

また日豪関係史など、従来手薄な研究分野に鍬を入れたことも、本論文の大きな功績と見るべき点である。

他方で、「文明国標準」という概念がなお十分煮詰まっていない憾みはある。その内容が曖昧で、分析道具としては幅広すぎるのではないか、という疑問もあろう。しかし、そのことはむしろ今後の議論を刺激する種となるものであり、決して欠点、問題点などと否定的にとらえるべきではあるまい。

したがって、本論文は、多くの点で現在の学界動向に十分貢献しうる水準にあり、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認めるものである。